審査員賞　中学生部門

# 祖父との思い出

東京都文京区
国立お茶の水女子大学附属中学校３年
園　櫻子

物事に取り組むとき、最善をつくす。これはどんな場面でも必要なことだ。しかし、人間には感情があり、喜怒哀楽を表情や態度、言葉で表してしまう。それは人間のコミュニケーションツールであり、必要不可欠な能力だが、この能力が大きなダメージを与える場面もある。それを教えてくれたのが亡くなった祖父だ。

私が幼少の頃、囲碁に興味を持った兄だったが周りに囲碁を打つ友人がおらず、私が相手になるようにと少しずつ教えてくれるようになった。両親も囲碁は全くわからず、唯一理解してくれたのが祖父だった。

だが、祖父は九州に住んでおり、年に二度会う程度だった。なのでたまに会うと兄とよく囲碁を打っていた。私は黙って二人が打つのを見るのが好きだった。

ある日、祖父が私と一局打ってくれることになった。私は見よう見まねで挨拶をし、兄が教えてくれた事や局面を見て覚えた手を一生懸命打った。勿論、勝てるはずもない。

対局が終わり、横で見ていた祖母が小さい子相手だから負けてやる様話していた。そのとき祖父は、「小さいがこの子は挨拶をきちんとして長時間の正座に耐え、今打てるすべてを出して戦った。真剣な相手に負けてやるのは失礼だ。負けて悔しくても癇癪も起こさず整地している。今負けても次勝てるように教えるんだから、黙っていなさい」と言って、丁寧に解説してくれた。

この時の言葉はずっと私の心に残り、どんな時でも平常心を保つように心がける様になった。

囲碁の大会のとき、自分より小さな子相手でも慢心しない。年上だから負けると思わず、自分のすべてを出して挑戦する。己れを知り、引き際を知る。最後まであきらめない。そして、相手との駆け引きでは局面を広く見て、相手の態度を読む。祖父が話してくれた、勝敗にかかわらず美しい局面を作るために。